様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０９２３

研究課題名（和文）精神療法過程Ｑセットを用いた心理療法過程の実証研究－大学院教育への応用－

研究課題名（英文）Empirical study of psychotherapy according to Psychological process Q-set: applying to the training of counseling in a graduate school.

研究代表者
山科　満（Yamashina, Mitsuru）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：４０３０６９５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：　臨床心理士養成指定大学院における「試行カウンセリング」の面接逐語録を対象に精神療法過程Qセットによる評定を行い、これと教員による成績評価を対応させることにより、「良い」面接と「悪い」面接の違いをPQSの項目に則して具体的に提示することを目的とした。
　評定結果と教員による総合成績評価の関連はほとんどみられなかった。対象となった面接単独の成績評価との関連では、面接の構造化，助言，課題の設定，支持といった技法の多用は「良い」評価に繋がらないことが示された。自己開示も面接の高評価には結びつかなかった。前記の技法の使用と中立性の兼ね合いが指導上の課題であることが見いだされた。

研究成果の概要（英文）：　Differences of good and bad sessions of "trial counseling" practiced by students of graduate school of clinical psychology were investigated according to 100 items of Psychological process Q-set(PQS).
　There were no significant relations between total grades of "trial counseling" and PQS assessments. Several items of PQS assessing the transcripts of the third session of "trail counseling" were related to good grades of the third session. Active interventions of the therapist such as structuring, giving guidance and advises, giving tasks outside of the session, and giving support were related to bad grades. Self-disclosure of the therapists do not contributed good grades, too.
　It is important task in the training of counselings that such techniques are accommodated to the neutrality of the therapists.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：心理面接過程　大学院教育　試行カウンセリング　精神療法過程Qセット

１．研究開始当初の背景

（1）従来の臨床心理学研究における問題

わが国の臨床心理学研究は，従来は事例研究を中心に行われてきた。事例研究では，クライアントの発言や，セラピストの介入が丹念に分析され，それを基に新たな技法や理論が生み出されてきた。しかし，こういった研究方法では，面接データが研究者によって恣意的に選択され，研究結果を客観的に検証することが出来ない，という問題的が指摘されている。臨床心理学研究をより実証的に行うことが今後の課題であると考えられる。

（2）精神療法過程Qセットについて

事例研究における前述の問題を解消する方法のひとつとして，Jones,E.E.（2000）が開発した精神療法過程Q セット（Psychological process Q Set; PQS）があげられる。PQS は，１回の心理療法面接の完全逐語記録を対象として，面接内の事象を数量化して評定するための測度である。その評定項目は100 項目に及び，さまざまな心理療法の面接内容に幅広く対応できるように調整されており，特定の理論に偏ったものではない。したがって，PQS は現在行われている多くの個人心理療法を対象として面接の内容に踏み込んでの実証研究を行うのに極めて適した測度である
と考えられる。

PQS 日本語版の作成は守屋ら（2004，2007）によってなされた。また，異なる心理療法の内容的な相違を数量的に示した研究により，PQS 日本語版の臨床的な妥当性も検討されている（山科ら，2006，鈴木ら，2006）。PQS を用いて，訓練中の大学院生の面接を対象とした予備的研究も着手されている（吉見ら，2009）。PQS は面接中のセラピストの発言やクライエントの言動および両者の相互作用を数量的に評価するため，他の評価尺度や治療転帰との関連を探ることにより，面接内で生じている事象の影響を具体的に検証することが可能であり，今後の応用可能性が期待できる。

（3）大学院教育における課題

大学院における実践的な面接訓練は，「臨床心理基礎実習」の中で，「試行カウンセリング」という方法で行われることが多い。「試行カウンセリング」は模擬クライエントの協力を得て行われる，極めて実践的な臨床教育法である。しかし，「試行カウンセリング」を対象とした研究は乏しく，特に実際に行われている面接の内容に踏み込んでの研究はわずかに吉見ら（2009，2010）があるに過ぎない。臨床心理学研究がエビデンスに基づいて行われつつある今日，「試行カウンセリング」についても面接の内容に踏み込んだ実証研究を行う必要があると考えられる。

２．研究の目的

本研究では，PQSを用いて大学院生の面接を評定・数値化し，これと成績評価との関連を調べることにより，①教育を受ける大学院生に，面接技法として学習すべき課題を視覚的に提示する，②教育する者に，大学院教育の重点目標を具体的に提案する，の2点を具体的な目標とする。

PQS は，心理療法過程を客観的に記述するために開発された。評定は１回の心理療法面接の完全逐語記録を対象として，そこで生じている患者の発言内容や態度，治療者の態度や介入内容，および両者の相互作用が検討される。それによって，1 回の面接内容および過程を数量化・可視化して検討することが可能になる。PQS によって面接内の事象を汎理論的に数値化することにより，主観的な研究方法では見落とされていた重要な点を見いだすことが可能になる。大学院での臨床心理学教育においても，面接技術を教育する際に教育者の主観だけに頼らず客観的な指標に基づいた指導を行う意義は大きいと考えられる。
た。

３．研究の方法

A 大学院（臨床心理士養成第 1 種指定校）において 1 年次の後期に行われている「試行カウンセリング」を研究対象とした。同大学院での「試行カウンセリング」は「統合的」な立場で教育指導がなされている。面接回数は 5 回と定められている。大学院生とその面接協力者に対して協力を呼びかけ，両者から書面で同意が得られた 33 例について，第 3 回面接の逐語記録を個人情報を削除した上で提出を受けた。この逐語記録を，PQS 評定に熟達した 2 名の評定者が予備情報無しに独立して評定した。すべての面接で評定者間の一致度は Speamann-Brown 補正値で 0.6 以上であった。2 名の評定の平均値を項目ごとに算出して評定値とした。

（1）試行カウンセリング全体の成績評価と PQS

A 大学院で実習指導に当たった 2 名の教員が合議により 17 ケースの成績評価を行った。評価方法は，大学院の授業・実習で採用されている通常の 4 段階評価（AA～C）とし，「試行カウンセリング」全体に対して行われた。

得られた成績評価と PQS の項目の関連をみるため，成績良（AA および A）群と不良（B ないし C）群で，PQS の各項目事に群間比較を行った。

（2）評価対象面接のランク付けと PQS 評定

A 大学以外の大学院で臨床心理基礎実習の「試行カウンセリング」を直接指導している 2 名の大学教員が，PQS 評定対象となった第 3 回面接のうち，23 例について 4 段階のランク付けを行った。評価の基準は大学院の授業・実習で採用されている通常の 4 段階評価（A～D）とし，その基準は公表されているシラバスから採用した。評価が分かれた面接については 2 名の合議を経て評価を確定し，これを「良い」面接（A ないし B）と「悪い」面接（C 以下）の 2 群に分け，PQS の各項目事に群間比較を行った。

４．研究成果

（１）全体の成績評価とPQS評定の関連

①2群間の比較

項目毎に面接の評定結果を2群間で t 検定により比較し，有意差のある項目を抽出し検討した。表1に，２群間で評点に有意差があった項目を呈示した。

表1．成績良群と成績不良群で評点に差があった項目

項目番号と内容（最高 9 点～最低 1 点）		良群	不良群
29	C は自立したい・他人と距離を取りたいと話す	6.4	4.1*
60	C がカタルシスを体験する	6.1	5.1*
63	C の対人関係が話題になる	7.4	5.5†
69	現実の生活状況が強調される	6.3	7.7†
80	T は視点の変換を促す	4.6	5.8*
82	C の面接場面での行動が話題になる	4.4	4.8†
90	C の夢・空想が話題になる	4.5	5.6†

†p<0.1　*p<0.05　　T:ｾﾗﾋﾟｽﾄ　C:ｸﾗｲｴﾝﾄ

②差が認められなかった項目のうち，セラピストの言動を評価した項目

項目3(話を促す, 全体の平均7.6, 以下同)，項目9（冷淡：低いほど暖か，1.8），項目21（自己開示する，5.1），項目27（助言やガイダンス，4.9），項目31（詳細に尋ねる，7.2），項目37（教師的態度，1.7），項目45（支持的態度，5.6），項目51（保護者的態度，1.5），項目77（言葉が技術不足で無神経，3.4），項目85（保証を与える，4.2），項目93（中立，5.9）などは，両群で差が認められなかった。

＜考察＞

「試行カウンセリング」全体の成績評価の良い群は，　クライエントの対人関係が取り上げられ，特に対人関係での自立に関する内

的側面が話題になっていて，話すことでCは情緒的な開放感（カタルシス）を体験していたことがうかがわれる。C の視点の転換を促すTの介入は控え目であった。クライエントの感情に焦点が当てられた面接が行われたと言える。評価されない面接では，現実の生活状況が強調され，あるいは夢･空想が話し合われるが，対人関係に根ざした内的体験が話し合われにくい面接であったと思われる。

一方，セラピストの基本的な態度としての暖かさ，押しつけたり見下したりしないこと，詳細に尋ねること，などは成績に係わらず出来ていることがわかる。ただしPQSを用いた先行研究において，熟練者の面接では，自己開示はより低く，無神経な言葉遣いはより低く評定されることが通例である。全体的に，個別の面接の良し悪しとは必ずしも「試行カウンセリング」全体の成績評価とは関連しない可能性が示唆され，解析方法を検討し直すべきと考えられた。

（２）評価対象面接のランク付けとPQS評定の関連

「良い」面接，6 例「悪い」面接 16 例（分類困難 1 例を除外）に群分けされた。群間で有意差・有意傾向が認められた項目について，表 2 に示した。

＜考察＞

セラピストの基本的な態度については差が見られないものも多くあり，「悪い」群であっても基本的な態度については問題なく身についていることが示された。この点は（１）の結果と同様である。

（２）で特徴的なのは，面接の構造化，助言，課題の設定，支持といった技法の多用は「良い」評価に繋がらないことが示されたことである。自己開示も面接の高評価には結びつかないようである。前記の諸技法の使用と中立性の兼ね合いが指導上の課題であることが明確に示された。

表 2. 良い面接と悪い面接で評点に差があった項目

項目番号と内容（最高 9 点～最低 1 点）		良い群	悪い群
3	Tは話を促進	8.2	7.6†
10	CはTと親密になることを求める	1.2	1.7†
17	Tは面接を構造化する	3.9	6.7*
21	Tが自己開示	4.3	5.2*
27	Tが助言・ガイダンス	3.5	5.5**
33	Cは誰かと近づきたい	7.1	5.1*
37	Tは教師のよう，指導的	1	1.6*
38	面接室外での課題を話す	3.8	5.5*
45	Tは支持的	3.5	6.1**
48	TはCの行動･意見の主体性を奨励	4.7	5.3†
63	対人関係が話し合われる	8.6	6.9**
6	Tは保証を与える	3.8	4.4*
69	最近の生活状況の話題	4.9	6.9*
70	Cは気持ちをコントロールするのに苦闘	5.3	4.9†
72	Cは面接の本質を理解	6.8	6.1*
89	TはCの防衛を強化する	4.3	5.4†
93	Tは中立的	7.1	5.4**

†< 0.1　*< 0.05　**< 0.01　T:ｾﾗﾋﾟｽﾄ　C:ｸﾗｲｴﾝﾄ

（３）総合考察

「試行カウンセリング」全体の成績評価と，単一の面接の評定結果の関連は乏しかった。成績評価は，逐語録に基づかないスーパーヴィジョンおよびレポートによって総合的になされることから，関与する要因が多岐にわたり，結果的に個々の面接技法の良否と成績評価が結びつかないものと考えられる。このことは，技法の正しい用い方を成績評価の対象項目とするためには逐語録に基づく指導が不可欠であることを示していると考えられる。

他方，PQSの評定対象となった面接をシラバスの評価基準に基づいてランク付けした結果とPQSの評定結果の関連は明確に示された。このランク付けは，「試行カウンセリング」の指導を他大学で実際に行っている教員がシラバスの基準を考慮しながら合議で行ったものであり，指導の目標に則した評価である。この成績評価に基づくことで，「良い面接」「悪い面接」の特徴をPQSの項目に則して抽出することが可能になっている。

具体的な技法をPQSの項目に則して検討すると，構造化，課題の設定，助言やガイダンスを与える，といった積極的な介入技法はいずれも「悪い」面接で優位に評点が高かった（すなわち目立っていた）。支持も「良い」とされた面接では評定平均値が3.5と積極的に用いられていないことが明らかになった。さらに自己開示も「悪い」面接で目立っていた。セラピストの積極的な介入は，多くの場合効果的なものとなっておらず，結果的に中立性を保ち傾聴に徹した面接の方が「良い」面接と判断されていたと言える。

結論として，大学院における臨床心理面接教育においては，①逐語録を用いて技法の効果的な使用について詳細に検討すべきであること，②大学院生の用いる積極的な介入技法は効果的な面接につながりにくいことから，これらの技法の使用は控え中立性を保ち傾聴を優先する面接を指導すべきであること，の2点を提言したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①<u>鈴木朋子</u>，<u>山科満</u>，鈴木慶子，馬渕麻由子，中康，鈴木菜実子，堀内麻美，守屋直樹，木下利彦：短期力動精神療法過程―精神療法過程Ｑセットを用いた検討―．精神療法，査読有，2013，39，93－101

〔学会発表〕（計２件）

①<u>山科満</u>，<u>葛西真記子</u>，<u>鈴木朋子</u>，<u>森裕子</u>，名尾典子「試行カウンセリング」面接の精神療法過程Ｑセットによる評定　―「良い」面接と「悪い」面接の違いは何か―．日本心理臨床学会第33回大会．2014年8月25日(予定），横浜国際平和会議場

②<u>山科満</u>，<u>葛西真記子</u>，<u>鈴木朋子</u>，<u>森裕子</u>，名尾典子：「試行カウンセリング」の評価に関する実証研究―精神療法過程Ｑセットを用いて―．日本心理臨床学会第 32 回大会．2013年8月28日，横浜国際平和会議場

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
山科 満（Yamashina Mitsuru）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：40306957

(2)研究分担者
葛西真紀子（Kasai Makiko）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：70294733

伊東(鈴木)　朋子(Ito(Suzuki) Tomoko)
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：60422581

(3)連携研究者
森裕子（Hiroko Mori）
文教大学・人間科学部・教授
研究者番号：20348428